第11回　広島大学心理臨床セミナー

教師のメンタルヘルスの心理臨床的理解と援助

岡本祐子（広島大学大学院教育学研究科）

これまで学校教育の中で、不登校やいじめをはじめとして、子どもの心の問題については多くの関心が注がれ、その理解と対策について、真剣な討議が行われてきた。しかし最近の10数年間に見られる学校臨床のもう一つの重要な問題として、教師のメンタルヘルスの悪化がある。2007年12月に発表された文部科学省の調査報告によれば、2006年度中に病気で休職した公立学校教員は、7655人で、過去最多を記録した。そのうち61%にあたる4675人は、うつ病などの精神科疾患によるものであり、これもまた過去最多であった(FIG.1)。病気休職者は、1993年度の3364人から14年連続で増加し続けており、特に精神疾患による休職者は、この11年間でほぼ3倍となっている。

また、「学校ストレス」「教師バーンアウト(燃え尽き症候群)」という言葉も広く知られるようになった。教師のメンタルヘルスの問題は、上記のような「数」の問題のみでなく、うつやバーンアウト的な状態で勤務を続けている教師も休職者の数倍は存在すると考えられること、またこれらの問題は、教師経験の浅い若い教師だけでなく、ベテランといわれる中年の教師にも少なからず見られることなど、非常に奥の深い問題を内包している。

2007年1月27日に東広島市民文化センターにおいて開催された第11回広島大学心理臨床セミナーでは、このような我が国の教師のメンタルヘルスの問題をとりあげた。学校臨床の領域において我が国の第一線で活躍しておられる山本力先生(岡山大学)、伊藤美奈子先生(慶応義塾大学)、新井肇先生(兵庫教育大学)の3名の先生方をお招きし、それぞれ、(1)カウンセリング事例からみた教師のメンタルヘルスの現状と課題、(2)教師のうつの理解と援助、(3)教師のバーンアウトの理解と援助、の視点から講演していただいた。その詳細は、本紀要に掲載された論文をご覧いただきたい。

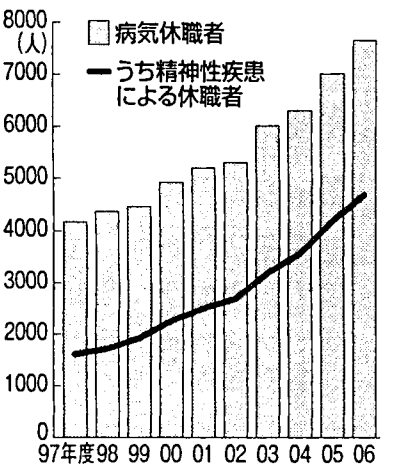

FIG.1　病気で休職した公立学校教員の数
（文部科学省調べ）

また講演の後、(1)教師個人や学校組織・同僚間での理解と支援のあり方、(2)教師としてのキャリアアップや教師アイデンティティの深化には、何が必要なのかという問題をめぐって、フロアの学校現場の教師を交えて、活発な討議が行われた。